

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02479

研究課題名(和文) エスキモー語からみた指示詞と名詞化の共通概念基盤に関する認知類型論的研究

研究課題名(英文) A Cognitive-Typology Approach to the Common Conceptual Ground between Demonstratives and Nominalization

研究代表者

田村 幸誠 (Tamura, Yukishige)

大阪大学・言語文化研究科(言語文化専攻)・准教授

研究者番号：30397517

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はユピック・エスキモー語の記述をきっかけに、その類型論的な含意を求めるところに特徴がある。エスキモー語には指示詞が約30あり、英語がthis/thatあるいは日本語がこ・そ・あで済ませるところに対して30通りの空間指示の区別をすることで面白さがあり、英語や日本語の言語使用に潜んでいる言語使用の認知的ポテンシャルを考察することができる。このテーマと関連する名詞化現象に沿って、論文を4本(投稿中1本、印刷中解説論文1本を除く)を執筆した。また、国際学会で3度発表、特に、国際類型論学会という類型論の一番大きな国際的組織で2度発表した。また、国内の研究会等でも4度発表を行った。

研究成果の概要(英文)：This research attempts to clarify typological characterizations on demonstratives and nominalization though describing Yup'ik Eskimo grammar. While English shows a dichotomous distinction in terms of demonstratives such as this vs. that, Yup'ik employs 30 demonstratives for that purpose; if one wants to use Yup'ik demonstratives appropriately, he/she has to know how the space is cognitively organized with 30 demonstratives. In other words, the analysis of Yup'ik Eskimo demonstratives provides us with an opportunity to learn about our potentiality on our spatial references, which we could not obtain through the use of the demonstratives observed in the dichotomous system most commonly employed. With this idea in mind, I wrote four papers and three international conference presentations including those at Association of Linguistic Typology.

研究分野：認知類型論

キーワード：指示詞 名詞化 ユピック・エスキモー語 認知言語学

1. 研究開始当初の背景

近年、類型論的な名詞化 (nominalization) の研究が盛んであり、その傾向に対して、報告者が記述観察している言語であるユピック・エスキモー語ではどのような特徴があるのか、また、どのような類型論的な含意があるのかに大変興味があった。また、これまで研究してきた指示詞は同じく名詞に分類されるカテゴリーであり、その記述をあわせて大小の一般化を出せれば、言語の理解に大きく寄与するのではないかと考えた。

2. 研究の目的

言語理論の形成において、一般に、記述・考察のすすんでいる西洋言語を範とする場合が多い。その一方で、世界的な類型・共通性をとらえる場合、その西洋言語的な視点がバイアスとして働くことも多々有る。本研究は、当該領域のユピック・エスキモー語の記述を通じて、言語理論にデータの知見を提供するとともに、より広い形での一般化ができるよう考えることが目的である。

3. 研究の方法

まず、ユピック・エスキモー語に関しては現地調査を中心に行った。John Toopetlook さんというユピック・エスキモー語話者 (元アラスカ大学、ユピック語講師) に依頼してアラスカ州フェアバンクス、およびベセルで様々なタイプの聞き取り調査をアレンジした。(i) 絵とビデオを見ながらの聞き取り (ii) 自由会話の聞き取り、(iii) 言語的背景をもつインフォーマントとのやりとり (iv) 英語からの翻訳。たくさんのおさめることができ、まだ整理ができていないが、現在、そして、今後の研究に非常に役立つデータと考え方を手に入れることができた。

4. 研究成果

まず柱となる研究成果に関しては、国際類型論学会 (Association of Linguistic Typology) における二つの発表がある (学会発表番号 1 と 9。まず、9 について述べる。9 に関しては、ユピック・エスキモー語の名詞化 (nominalization) に関する中心的な特徴を説明するとともに、認知言語学の枠組みで、特に認識論的な観点からどのように特徴づけることができるのかを述べた。この観点から得られた興味深い知見は、言語の類型が大きく異なる Tibeto-Burman 諸語の名詞化、および Athabaskan 諸語に観察される名詞化の特徴と比較する方向に研究が進展したことがある。具体的には、論文 4 で少し、その

概要を述べ、研究発表 2 において、日本で開かれた国際ワークショップで 3 言語の nominalization の共通点と差異を比較する形で説明することができた。

この観点からユピック・エスキモー語に関してまとめた論文が、論文番号 1 の論文であり、nominalization の特徴が類型論的な視点に立って、鳥瞰図的に読めるように構成されている。

また、このトピックを理解する過程で、エドワード・サピアに始まる記述言語学の歴史と進展にも目を向けることができた。従来の理論言語学ではもうほとんど目の向けられないことがない文献かもしれないが、ユピック・エスキモー語、およびアサバスカン諸語の特徴を考察・吟味する過程で、非常に authentic な北米言語の記述文献に触れることができ、見識を深められることができた。このことを発表したのが、学会発表番号 3、4 および 7 である。

学会発表番号 1 の国際類型論学会において、ユピック・エスキモー語の指示詞に関する発表を行った。ユピック・エスキモー語の指示詞が 30 程あり、その使用を理解することは人間の空間把握の潜在性を理解する上で非常に重要なことであると考えられる。その上で、学会発表 1 では、その特徴、とくに地形 (topography) の影響をイヌイト・エスキモー語の指示詞の体系と比較する形で発表した。この分野での先駆的研究者である宮岡伯人教授の論考を視野に入れつつ、この分野において現在最も進んだ論考であると考えられる Levinson の一連の空間把握の研究との対比を行った (現在この点に関して論文執筆中である)。ユピック・エスキモー語の指示詞の全体像に関しては、論文番号 2 において、詳細な記述を行った。

この領域において非常に興味深かったのはイヌイト・エスキモー語との比較であり、John Toopetlook 氏のはからいで、アナクツールピックバス、というイヌイトの村でも 1 週間ほど指示表現の調査を行った (このトピックに関しては今後も集中して継続していく必要がある)。またこの点に関して、一般的な聴者に向けての話をする機会が持てた。それが学会発表 3 にあたる (同じ内容を学内の文理融合ワークショップでも発表した)。

本研究を行うにあたり、特に 3 人の方々に感謝したい。まず、アラスカ大学元ユピック語講師の John Toopetlook 氏である。論文、研究発表に用いた全ての例文やデータは、ユピック・エスキモー語母語話者の John Toopetlook に目を通していただいている。他の研究者の論文や辞書から得たデータ、報告者が他のインフォーマントから得たデータ、全てを確認していただき、その妥当性をチェックしていただいた。報告者の論文や発表に

おけるユピック・エスキモー語のデータの信頼性は全て、John Toopetlook 氏のおかげである。また、この3年間の研究の進展と方向付けに関して、ライス大学のスザンヌ・ケマー教授の援助がある。学会発表番号5の国際シンポジウムは報告者とケマー教授による企画であり、認知言語学における類型論的方向性の重要性に関して多くの研究者と2日間の討論を行うことができた。最後に、ライス大学のMasayoshi Shibatani 教授にも研究の進展に関して感謝を述べる必要がある。学会発表番号2と6にある Nominalization Festa は Shibatani 教授が開かれた名詞化に関する国際ワークショップであり、様々な異なる言語の研究者と意見交換する機会を持つことができた。特に Tobeto-Burman 諸語、および、関係節の取り扱いに関して、非常に有益なごろんをすることができた。本科学研究は上記3名の先生とその研究の示唆がなければ成立しなかったと考えられる。きして心から感謝申し上げたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

1. Tamura, Yuki-Shige, "Nominalization in Central Alaskan Yup'ik," 『時空と認知の言語学 VII』, 31-40, 2018年05月, 学術論文.

2. Tamura, Yuki-Shige, "A Supplementary Description of the Use of Demonstratives in Central Alaskan Yup'ik," 『認知・機能言語学研究 II』 1(1) 31-40, 2017年05月, 学術論文.

3. Tamura, Yuki-Shige, "Stable Grammatical Marking and Denominalization: A Special Attention to Central Alaskan Yup'ik," 『認知・機能言語学研究 I』, 1, 11-20, 2016年04月, 学術論文.

4. Tamura, Yuki-Shige, "Metonymic Coercion and Relativization," 『時空と認知の言語学 IV』, 41-50, 2015年05月, 学術論文.

5. Izutsu, Katsunobu and Yuki-Shige Tamura (2016) "Independent of change or constitutive of change: Event construal of unstable recipient role in prototypical ditransitive events," *PROCEEDINGS OF THE 11TH HIGH DESERT LINGUISTICS SOCIETY CONFERENCE*, vol. 11, 175-197.

[学会発表](計 9 件)

1. Tamura, Yuki-Shige (2017) "The River Mouth and a Topological Mapping between Global

Absolute FoR and Local Absolute FoR: A Perspective from Central Alaskan Yup'ik," 12th Meeting of the Association for Linguistic Typology, at the Australian National University.

2. 田村幸誠 (2017) "Grammaticalization and Nominalization in Central Alaskan Yup'ik" Nominalization Festival III, 2017年07月.

3. 田村幸誠 (2017) 「見えないセンターラインと空間認知表現」第7回認知文法研究会 (大阪大学)2017年03月.

4. 田村幸誠 (2016) 「ユピック・エスキモー語の従属節形成について:日本語との共通点と相違点を求めて」中部日本・日本語学研究会, 2016年07月.

5. Tamura, Yuki-Shige (2016) "Stable Grammatical Marking and Grammatical Denominalization", International Workshop of Cognitive Grammar and Usage-Based Linguistics, 2016年06月.

6. Tamura, Yuki-Shige (2016) "Grammatical Nominalization and Denominalization: with Special Focus on Alaskan Central Yup'ik", Nominalization Festival II, 2016年06月.

7. 田村幸誠 (2016) 『認知言語学と言語類型論:Edward Sapirからはじめてみると』 広島大学大学院 総合科学研究科 21世紀プロジェクト 言語と情報研究, 2016年02月.

8. 田村幸誠 (2016) 「人称マーキングからみた脱従属節化現象—Central Alaskan Yup'ikを中心に—」 Kansai Lexicon Project, 2016年01月.

9. Tamura, Yuki-Shige (2015) "A functional account of the development of nominalized verbal forms to finite forms," 11th Meeting of the Association for Linguistic Typology, at the University of New Mexico, 2015年08月.

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.dma.jim.osaka-u.ac.jp/view?l=ja&u=10001737>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田村 幸誠 (Yuki-Shige Tamura)
大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号：30397517

(2) 研究分担者 0名

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 0名

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

Suzanne Kemmer・Assoc. Professor・Rice University.
Masayoshi, Shibatani・Professor, Rice University.